

タ リ タ ・ ク ム

“Talitha, koum”

「少女よ、私はあなたに言う。起きなさい」（マルコ5：41）

日本聖公会 正義と平和委員会・ジェンダープロジェクト

第20号

2013年 5月25日

〒162-0805

東京都新宿区矢来町 65

日本聖公会管区事務所気付

正義と平和委員会

・ジェンダープロジェクト

TEL03-5228-3171

発行責任者：大岡左代子

原発と女性—女たちから女たちへ—

木川田道子

「原発と女性」というテーマをいただき、今、自分に何が書けるのだろうかと自問自答しながら、それでも、これまで個人的に関わってきた脱原発の市民運動を通して感じてきたことや、考えたことを書くことで、また誰かとつながったり、何かを共有できたら、という思いで書いてみようと思います。

私が住んでいる和歌山県がある紀伊半島には、かつて4町5カ所もの原発計画がありました。次々と浮かんでくる電力会社による原発計画に対して、反対を叫ぶ地元の人たちや支援者らが息長い運動を続け、計画を阻止してきたという歴史があります。私も、その運動がもっとも激しかった1980年代、知り合いの年輩の女性に誘われ、脱原発に取り組む市民グループ「つゆくさと大地の会」という会の一員となり、以来、脱原発の運動に細く長く関わることになりました。この会は女性たちが中心となって始めたもので、その動機の主なもの、自分の子どもや孫に負の遺産を残してはいけないという気持ちだったと思います。原発からできるプルトニウムの半減期は2万4千年と言われます。それだけ待って

も毒性が半分にしかならないものを大量に溜め込んでいったい誰が責任を持てるというのか。プルトニウムはわずかでも体内に入ると肺や骨に長くとどまり細胞や遺伝子を傷つけると言われています。その頃、猛毒ダイオキシンが母乳から検出されたという報道にも不安を覚えながら子育てしていた私には、原発こそ人間が作り出した究極のゴミ問題だと思えました。またプルトニウム7～8キログラムで原爆1個を作り出すことができると聞き、直観的に「こわい」と感じたのだと思います。

（今では日本が保有するプルトニウムで数千発の核兵器が作られる量が溜まっています。）

女性達は「原発・井戸端会議」と称する会議を開き、建設計画のある地域の女性たちと連帯を深め、どうしたらこの運動が広がるのかを一緒に考えたり、ビラ配りをしたり、原発反対派の首長を当選させるために奔走したりしました。私は、仕事、子育て、介護、他の市民運動と並行しながらで、その時々に関わり方の深さはさまざまでしたが、その中で、運動を進めていくための具体的な方法を学ぶと共に、たくさんの女性たちの“思い”といった

ものも受け取ってきたように思います。たとえば、体を張ってでもそこにある「いのち」や暮らしを守ろうとする“気迫”や強い“信念”とも言うべきもの、あるいはあきらめない“粘り強さ”などです。それらが何から来るのかわかったような気がしたのは、ある日の例会で、原発と関係ない『葫蘆島大遣返（ころとうだいけんへん）（*）』というビデオをみんなで見た時でした。運動のリーダーでもある年輩の女性が「こういうことがあったということを若い人に知っておいて欲しい。為政者にだまされたらあかん。」と話されました。戦時、「国策」の名の下にいかにも市井の人々が翻弄され、戦後も苦勞を強いられてきたか。そのくやしさを身を以て体験してきた女性たちは、安全と言いながら地方にだけ危険な原発を押し付けたり、農家や漁師にとっての命綱である農地や漁業権を売らせたりして、その補償金や補助金をもらうことで地域が潤うといった話のうさん臭さや、中央から遠く離れた場所に住む人の命を軽く見る「時」の権力者のありようを敏感に感じていたのだと思います。「だまされてはいけない」という思いは私にも刻み込まれました。そして、その時は気づきませんでした。それらは「私的なことは政治的なこと（“The Personal is Political”）」だというフェミニズムの視点でもあったのだと後になって思いました。また運動に関わらない場面でも女性たちはやはり何かしら話し好きで、何かあれば気にし合う関係性や、「自分があきらめない限り希望はある」という樂觀的なところがあったのだと思います。紀伊半島では、その後、使用済み核燃料の中間貯蔵施設の話が持ち上がったとしても、運動はひと息ついた状況でしたが、その数年後に東日本大震災と福島第一原発事故が起きて

しまいました。

今年、事故から2年が経ちましたが、事故は一向に収束せず、事故の原因は究明されず、放射性廃棄物の今後については議論さえありません。そんな中、日本政府は、核拡散防止条約（NPT）再検討会議の第2回準備委員会で出された「核兵器を二度と使わない」という約束が入っている「核兵器の人的影響に関する共同声明」に署名せず（4月）、アラブ首長国連邦（UAE）やトルコへの原発技術輸出を矢継ぎ早に正式に決めました（5月）。これではまるで日本に原発事故など起こらなかったかのようです。

少し遡っての一昨年、私は、福島を訪れた際、偶然、街角博物館のようなところで、福島市内で出土したという土偶展を見る機会がありました。説明によると土偶の多くは女性で、お腹が膨らんでいるものもあるということでした。何のためにつくられたか定かではないが、多産豊穡を願ったり、縄文当時の乳幼児死亡率の高さから子どもが無事生まれ育つように、といった祈りの儀式の際に使われた可能性があるということでした。私には、3500年前に福島のこの地にいた女性たちやその共同体もまた、子どもが元気に生まれ、生き延びていってくれるようにと祈っていたのだと思うと、今ほどその祈りと重なる時はないように思えました。

今一番心配なのは、放射能の影響を大人より受けやすい子ども達への健康被害です。また少し別のことなのですが、配偶者間暴力の相談件数が前年比で6割増えた（福島県警2012年度報告）ほか児童虐待の件数も増えているという報告も気になります。

目に見えず、匂いもない放射能と戦いながら、そこで生きることを余儀なくされている

方々の、たくさんの行き場のない思いがそこにあることを思う時、そして、自分にできることの小ささを思うとき私は愕然とするほかにはないですが、でも私は、私のようなものも含めて、女性たちよ、どうかくじけないで、今こそつながろうと言いたいのです。私たちが信じるすべての命の源である神は、権力でもって弱い立場の人をさらに追いやる者の側にいるのではなく、お願いだからどうぞこれ以上子どもたちが傷ついたり、その命が失われることはありませんようにと祈りたい私た

ち一人ひとりの思いに共感し、寄り添い、今も生きて働いておられるのだから。

(女性デスク)

* 葫蘆島は、日本敗戦の翌年から、旧満州に居留していた在留邦人 105 万人の引揚港となった島。「葫蘆島大遣返」とは「葫蘆島から日本人を引揚げさせた一大プロジェクト」を意味し、「遣返」は中国語で、「元の所へ返す」という意味。(『葫蘆島大遣返』HP より)



第2回世界聖公会平和協議会 in 沖縄に参加して

大岡左代子

「平和を求め求め、追い求めよ」(詩篇 34 : 15)

「主は国々の争いを裁き、多くの民を戒められる。彼らは剣を打ち直して鋤とし、槍を打ち直して鎌とする。国は国に向かって剣をあげずもはや戦うことを学ばない。」(イザヤ書 2 : 4)

4月16日(火)～22日(月)まで沖縄で開かれた「第2回世界聖公会平和協議会」に参加しました。テーマは「東アジアにおける平和と和解に向けて」。このテーマは、2007年に開かれた第1回世界聖公会平和大会において合意された宣言に基づいたものであり、今回の協議会は日本聖公会と大韓聖公会との共催で開催されました。参加者は、韓国、日本、フィリピン、オーストラリア、カナダ、アメリカ合衆国、イギリス、アイルランドの聖公会からの約80名で、私は、正義と平和委員会の委員の一人として参加させていただきました。折しも、厳しい朝鮮半島



開会礼拝の説教：首座主教 植松 誠

情勢や日本国内の憲法改正の動きの活発化、沖縄の状況を置きざりにしたような「主権回復の日」の問題など、平和を脅かされるような事態が起きる中、私たち参加者は共に学び、祈り、話し合う時間を沖縄で過ごしました。米国聖公会総裁主教キャサリン・ジェファーツ・ショーリ主教は残念ながら一日目のみ

の参加でしたが、基調講演で平和の実現にむけたメッセージを語られました。

7日間の長いプログラムの前半は、沖縄のフィールドトリップと講演、各国からの報告など。後半は、グループ討議を重ねてコミュニケーション作成への提案を各グループでまとめていく、というものでしたが、大切なテーマであると共に、それぞれの「国」の立ち位置が違い、まずその違いを理解し合うことや、その違いを超えて「キリスト者」としてどの場所に立つのかを探りだしていく作業は決して容易なものではありませんでした。沖縄戦について悲しみや怒りをおさえこみつつも、その心の奥底にある平和への強い気持ちをもってガイドをしてくださった平和ガイドの女性の声に対して「沖縄戦の悲劇、沖縄の被害を語ることによって、日本のアジア諸国への戦争責任を見えにくくしていないか。」との声を耳にした時、さけて通れない戦争責任の問題がなお深く横たわっていることを実感しました。一方で、谷昌二主教や日本福音ルーテル教会の内藤新吾牧師、ダグラス・ラミスさんの講演からは、平和の実現に向けては「いのち」をまもる視点にたつことが大切であること、その中に宗教者がいることは人々の力になるという話を聞きました。

「東アジアにおける平和と和解の実現にむけて」などという広大なテーマに対して、一体教会は何かできるのか？キリスト者は何かできるのか？と一瞬たじろいでしまいたくなるような気がするのですが、「何かできることはないか？」と何らかの方向性を見出そうとする参加者の熱意こそが、実は平和と和解の実現にむけての大切なプロセスの一つではないかと感じました。残念ながら、話し合いは三カ国語でそれぞれに通訳入りだったこともあり、なかなか忌憚なく話し合う状況にはなりませんでした。それでも一人ひとりが真面目に出来事に向き合い、誠実に話し合おうとしていたことが印象的でした。閉会礼拝において大韓聖公会の金根祥主教はヨハネによる福音書14章31節「さあ立て、ここから出かけよう」を引用し平和にむけての険しい道を共に歩もうとおっしゃいました。それぞれの違いを超えて、でかける「ここ」とはイエスの福音に生きようとする姿勢なのかもしれません。イエスが語られた「神の国」の実現のために、これからも共に手を携えていくことを確認し参加者はそれぞれの地に帰っていきました。残念だったことは、やはり女性の参加者が少なかったことです。今回もコミュニケーションに「女性や青年の参加を保障する」という一文が入ったことをご報告しておきます。



「第2回世界聖公会平和協議会」プログラム

2013年4月16日（火）～22日（月）

16 (火) 14:00 受付（ホテル） 15:30 バスで三原聖ペテロ聖パウロ教会へ移動 16:00 開会礼拝 司式：武藤謙一主教 説教：植松誠首座主教 17:00 オリエンテーション 18:00 夕食 19:00 主題講演 ジェファーツ・ショーリ主教 （アメリカ聖公会総裁主教） 21:00 バスでホテルへ移動	19 (金) 朝食 9:00 「発題」（ていりるホール） ①「半島分断状況（TOPIK） 柳時京司祭 10:00 ②沖縄米軍基地、平和憲法9条 ダグラス・ラミスさん 12:00 昼食 14:00 グループ討議Ⅱ（ていりる会議室） 特別講演を受けて 17:00 ブレイク 17:30 夕食（ホテル） 19:00 各国報告（5/12 カ国）（ていりるホール） 21:00
17 (水) 朝食 「戦跡・沖縄戦の追体験」 12:00 昼食 フィールドトリップ 「基地巡り」 17:00 三原聖ペテロ聖パウロ教会到着 18:00 レセプション／夕食 挨拶：キム・グンサン主教 （大韓聖公会首座主教） 協議会会長：大畑喜道主教 （東京教区主教） 21:00 バスでホテルへ移動	20 (土) 朝食 9:00 各国報告（7/12 カ国）（ていりるホール） 12:00 昼食 14:00 グループ討議Ⅲ（ていりる会議室） 提言に向けて まとめ 17:00 フリータイム / 夕食 （ステートメントコミティー）
18 (木) 朝食 9:00 1 フィートフィルム（ていりるホール） 10:30 グループ討議Ⅰ（ていりる会議室） フィールドトリップ／主題講演を受けて 12:30 昼食 14:00 特別講演：原発と軍事化（ていりるホール） 内藤新吾牧師（福音ルーテル教会） 16:00 ブレイク 17:30 夕食（ホテル） 18:30 特別講演：原発と沖縄（ていりるホール） 21:00 谷昌二主教（元沖縄教区主教）	21 (日) 朝食 10:30 主日礼拝（沖縄教区各教会へ） 12:00 昼食 / フリータイム （ステートメントコミティー） 18:00 バスで沖縄教区センターへ移動 19:00 「フォーラム」声明／宣言 19:30 フェアウェルパーティー（エイサー等） 21:00 バスでホテルへ移動
	22 (月) 朝食 8:30 閉会礼拝（聖餐式）（ホテル） 司式：洪澤一郎主教 説教：キム・グンサン主教 10:00 解散



≡ 主題講演：ジェファーツ・ショーリ主教
(アメリカ聖公会総裁主教)



↑ フィールドトリップ (Aグループ)

嘉数高台 (普天間基地)



≡ 特別講演：原発と沖縄

谷昌二主教 (元沖縄教区主教)

特別講演：原発と軍事化 ⇒
内藤新吾牧師 (福音ルーテル教会)



≡ 「発題」：沖縄米軍基地、平和憲法9条
ダグラス・ラミスさん

琉球舞踊 ⇒
フェアウェルパーティー



国連女性の地位委員会(UNCSW57)に参加して

管区女性に関する課題の担当者 吉谷かおる



毎年3月8日の国際女性デーを含む約2週間、「国連女性の地位委員会」がニューヨーク国連本部で開催されています。日本聖公会では2005年から毎年2名の女性をACC(聖公会中央協議会)代表団メンバーとして派遣してきました。第57回(3月4～15日)となる今年は、笹森田鶴司祭(東京教区)と吉谷(神戸教区)が参加してまいりました。今年の優先テーマは「女性と少女に対するあらゆる形態の暴力の根絶と防止」でした。



報道によれば、今年の参加者は世界各国の政府代表団とNGO代表団ら約6,000人で、本会議では紛争地域での性的暴力、女性や子どもの人身売買、家庭内暴力などが大きな問題として取り上げられ、性的暴力を犯罪として裁くための国内法の整備、被害者救済策の強化、暴力防止の意識を高める教育の推進を各国に求める文書が全会一致で採択されて閉会となりました。節目となる2015年を前にした来年のテーマは、「女性と少女のためのミレニアム開発目標の実

施における課題と成果」です。UNCSW57と会期中のACC代表団の活動については笹森司祭が『管区事務所だより』で報告してくださっているので、ぜひお読みください。UNCSW57 ACC代表団決議、各管区の活動の資料等も別の機会にご紹介できればと思っております。ここからは吉谷のニューヨーク滞在記をハイライトでお伝えします。

2/28(木) 成田空港で田鶴さんと会えてひと安心。この半年、ぞくぞく届く資料、課題の提出に追われ、不安と緊張で青くなる日々だったが、いよいよNYへ出発だ。田鶴さんは出立ぎりぎりまでお忙しく、荷造りにさく時間もほとんどなかったようだが、「いっしょに歩こう! プロジェクト」の英語版DVDとお土産用のバッジ、「まどか」のまゆ玉をたくさん持ってきてくださった。

2/28(木) 12時間半のフライトで午後3時過ぎJFK空港に到着。すぐにNY在住の景山恭子さんが見つけてくださり、ホテルまで車で送ってくださった。恭子さんには、これまで派遣された方々もお世話いただいていたが、今回も準備段階から国連聖公会事務所(UNオフィス)や国連日本代表部とのやりとりから生活面のアドバイスまで何かと助けていただいている。心強いことに、私たちの滞在中、時間の許す限り同行していただけることになった。今年は聖公会事務所が参加者のホテルを一括で予約している。国連から1ブロックの便利な立地で、古いが雰囲気がよく、部屋も広くて素敵…と思ったら、部屋割りが2ベッドなのに3人となっている。トラブルの予

感! これは無事解決したが、田鶴さんのコミュニケーション能力の高さに、早くも依頼心が芽生える。一人でなくてよかった。

3/1(金) 午前中、さっそく UN パスを受け取るため国連に行くと、ACC 代表団リーダーのアン・スカンプさん(オーストラリア)に会う。彼女に言われて 815 と呼ばれるビルのオフィスに行き、担当者レイチェルさんから足りない書類をもらってから、再度 UN へ。夜は、ACC 代表団のオリエンテーションを兼ねたディナー。今年は 17 か国からの参加のようだ。代表団チャプレンは、第 1 回聖公会女性会議のゲストに来てくださったアリス・メドコフ司祭。英語の聞き取りに苦勞するが、世界の聖公会女性たちと知り合えるのはとても楽しみだ。

3/4(月) Ecumenical Women のオリエンテーション、NGO のコンサルテーション・デイを終えて、いよいよ会期が始まった。昨日のチャーチセンターでの「エフタの娘」をテーマにした礼拝は、よく準備されていて衣装、小道具も素敵だった。今朝は 815 に ACC 代表団が集合し、UNCSW のオープニング・セッションをウェブで視聴、その後 815 チャペルにて開会聖餐式。14 時から ACC 代表団ミーティング。この数日の感想、期待することなどをそれぞれが話し、分かち合う。私は他の管区での女性聖職の現状を知りたいということを話す(これはジェンダープロジェクトからのミッション)。

3/5(火) 815 チャペルにて Anwarul K. Chowdhury 師の基調講演。14 時から、救世軍を会場に、Girls' tribunal on violence (少女たちの法廷と訳すのか)。少女たちがメディアに起因する暴力、学校での暴力、共同体の中での暴力の事例を取り上げ、自らのおかれた状況や取り組んでいる活動について語る。運営も主体的に行っている。

3/6(水) 朝から反 FGM(女性器切除)のパラレルイベントに参加する。14 時から 815 チャペルにて Human Trafficking(人身売買)についてのパネルディスカッション(ジェファーツ・ショール総裁主教を迎えて)。事前提出のカントリーレポートでは、私たちの教会に属する女性も含め日本に住む女性にとって最も身近な暴力と思われる DV の問題を取り上げた。ところが出発の 10 日ほど前に、英国聖公会のテリー・ロビンソン司祭から、Human Trafficking に関する管区の取り組みがあれば知らせてほしいというメールが来て、私は大慌てをしたのだった。日本が人身売買の目的国、通過国として国際社会で非難を受けていることは知っていても、あなたの管区ではそれに対して何をしていますかと訊かれると、具体的に言えない。今回は田鶴さんがカパティランの活動を紹介してくださったからよかったが、自分の準備不足を痛感した。16 時より英国聖公会のマンディから彼女が共同ディレクターをつとめる Restored(女性に対する暴力の根絶を目的とした国際的なキリスト教団体)の活動について聞く。これも教会が社会に対して強く働きかけていることの実例として傾聴する。19 時より Holy Trinity Church にて Non-Violent Living についての講演会。ACC 代表団メンバーから、ジンバブエのアルベルティーナ、スリランカのビジュラ、ブラジルのイルセリアらが登壇し、素晴らしいスピーチをしてくれる。

3/7(木) 10 時より 815 にてフィービさんによる Anglican Women at Prayer の集まり。小グループでお祈りを分かち合い、心落ち着く時を過ごす。午後のパラレルイベントの後、17 時から田鶴さんが「いっしょに歩こう! プロジェクト」の活動を紹介することになっている。たくさんの聖公会関係者が集まって英語版 DVD を視聴し、放射能汚染が女性と少女に対する暴力であることを訴える田鶴さんの言葉を、共感をもって受けとめてくださった。オーストラリアのアーチデ

イーコン、カレンさんがきれいな声で 3.11 の被害にあった方々、今も苦しみのうちにある方々のためにお祈りしてください。祈りの輪の中で肩に手をおかれると力が注ぎ込まれ、なぜか涙になって溢れ出した。(この日のことは Anglican Communion News Service で報道されました。) 長い一日、18 時 30 分からは UN プラザ 866 にて日本政府代表团との懇談会に参加。今回知り合った YWCA、矯風会のメンバーの方々と交流を続け、パラレルイベントの共催などにつなげていければと思う。

3/8(金) 10 時 30 分より英国聖公会主催のパラレルイベント(We will speak out)に参加。彼女たちの行動力、発信力、社会への関与の深さに驚くだけではなく、ここでもらったものを日本でのハラスメント防止、暴力防止に生かしたい。資料が役立ちそうだ。12 時より国際女性デーの行進(March on March)に参加。氷雨の中だが、世界中から集まった女性たちとの連帯を感じ盛り上がる。集合地点では、潘基文国連事務総長のスピーチも聞いた。映画ファンとしては、女優のスーザン・サランドンさんが療養中のマラーラさんのメッセージを代読したのに感激。UNWOMEN のプーリさんの「女性に対する暴力は custom(慣習)ではなく crime(犯罪)だ」というメッセージが心に刻まれる。夜は 815 でのワイン・レセプションで交流。この時も食べ物、飲み物を豊富に用意してくださっていたが、いつもメザニンといわれる集合場所にお茶やお菓子を用意してくださっているし、軽食を出していただくことも多い。アメリカ聖公会のスタッフとボランティアの方々が目立たないところで私たちを支えてくださっている。

3/9(土) 待望のオフだ～。午前中 St. John the Divine 大聖堂ツアーに参加。NY では見る教会がどれも大きく荘厳で舞い上がってしまうが、ここは破格だ。聖餐式、ランチ後解散。近くのコロンビア大学、ユニオン神学校、リバーサイド教会と散策しながら見学。帰りにはブロードウェイ、タイムズスクエアなどでおのぼりさん気分を満喫したのだった。

3/10(日) 景山恭子さんの属する MJM(メトロポリタン・ジャパニーズ・ミニストリー)のご案内により、NY 郊外の James the Less 教会の聖餐式に出席。司式、説教は笹森田鶴司祭である。薔薇の主日であるため、ローズカラーの祭服に身を包んだ田鶴さんがりりしくも可愛い。そして東日本大震災とハリケーン・カトリーナの被災者救援のためのサイレントオークション、チャリティコンサートに参加。お集まりのお客様に「いっしょに歩こう! プロジェクト」英語版 DVD、若松聖愛幼稚園の映像等を田鶴さん、恭子さんと遠山京子さんが紹介してくださった。遠く離れたアメリカの方々が関心を寄せ、支援してくださることに深く感謝する。

3/15(金) 今週は、カントリーレポートの発表、帰国後のアクションプランの分かち合いなどで瞬く間に日が過ぎた。私も拙いながらも、女性が能力を発揮しにくい日本の社会(教会もしかり)で性差別に起因する暴力をなくすためには、意思決定機関における女性の比率を高め、対等なパートナーシップを築く必要があることを報告した。12 日にはアジア・ミニストリーが中華街でのディナーに招待してくださった。昨日の朝の礼拝(チャーチセンター)は、アングリカンが「マダラのマリア」をテーマに担当した。カナダのグロリアさんが考えた式文は、さまざまな暴力と困難にさらされた女性と少女たちの声、それぞれの国を代表しての祈りで構成された感動的なものだった。みんなの民族衣装も素敵だった。今日の閉会聖餐式が終わったらもうお別れの時が来る。名残惜しいが、これからは IAWN のネットワークや、フェイスブックを通じて交流することができるだろう。今後は派遣の意義をいっそう高めるため、「発信すること」、具体的にはパ

ラレイベントを開催するという目標に向けて準備していきたい。田鶴さんと二人、たくさんの経験を積んで、元気に帰国の途につくことができるのも、多くの方に支えられてのことであつた。日本でまたニューヨーク滞在中にサポートしてくださった皆さま、励まし、お祈りしてくださった皆さまに心から感謝申し上げ、この稿を終わる。

※日本聖公会婦人会被献日献金、東京教区、神戸教区、MJM からご支援をいただき今年も派遣を実現することができました。この場を借りてお礼申し上げます。ありがとうございました。(女性デスク)

『わたしの子育て事情 in Seoul』

アンジェラ 松山マリ

私は韓国ソウルの大学院に留学している夫と結婚し、2011年8月からソウルで暮らしています。主日は、大韓聖公会のソウル主教座聖堂に出席し日々を過ごしています。韓国では、ハングルをマスターしたいという思いのもと語学堂に通いました。しかし、2011年末に妊娠していることが発覚し、2012年の夏には韓国で出産を経験しました。現在は子育てに集中・圧倒され、あつという間に1年8ヶ月が過ぎました。執筆させていただくにあたり生活体験の一コマをお伝えできればと思います。

妊娠が発覚し、初めての出産をどこで迎えるか、初めてという不安と海外でも出産を経験してみたいという思いが交差しました。韓国での出産は、わざわざ日本からも出産するために訪れる人もいるというだけあつて施設は充実しており、病院のスタッフのみなさんも温かく丁寧に接してくださいました。さらに教会の牧師先生や信徒の方々が支えてくださり、無事元気な赤ちゃんを出産することができました。

海外で生活するというだけでも日本との違いなど、驚きや新発見の多い毎日です。さらに家族に赤ちゃんが加わり、より様々な視点で物事をみるようになりました。ベビーカーを押して町に出る機会が増えました。道の段差やエレベーターの位置、お店の広さ、オムツの替え台・授乳室の有無など必ずチェックするようになりました。ベビーカーひとつとってもソウルの道はデコボコしているために外出するのが一苦労です。それに適応するかのように韓国の赤ちゃんを連れたママのベビーカーは、タイヤが大きい空気入りのものなのです！何気なく歩いていた日本の道路は改めて整理されていて、老若男女にとっては過ごしやすいことに気づかされました。

また、赤ちゃんを連れて外出すると必ずといっていいほど声をかけられます。風が強く帽子が外れてしまったとき「風邪ひいちゃうぞ～」と帽子を被せてくださる人、食堂でご飯を食べていると食堂のおばさんが抱っこしてくださったこともあります。私の身長が小さいせいか、「子どもが子どもを出産したね」と言われたこともよくあり、笑ってしまいます。日本より結婚する年齢が遅くなり、その分出産も高齢化している韓国では私の年齢(24歳で出産)で赤ちゃんを連れているのは珍しいようです。しかし、たくさんの人に声をかけられ可愛がってもらえることは本当に幸せなことです。韓国に一年以上住んでみてもまだ知らないことが、まだまだたくさんあります。これからも子どもと一緒に知り、学べる毎日を過ごしていきたいです。

■ ■ ■ ■ ■ コラム わたしの瞳に映る景色 ⑧ ■ ■ ■ ■ ■

～ わたしと家族のエピソード ～

中部地区 司祭 アンブロージア 後藤香織

ある方から「毎回辛そうなことばかり書いてるけど、何か楽しいことは無いの？」と聞かれました。ですので、楽しいといえるかどうか分かりませんが、今回はわたしと家族のエピソードをご紹介します。

わたしは昔、子ども達から普通に「パパ」と呼ばれていました。現在は、「チッチ」と呼ばれているのですが、それはこんな理由からです。

子ども達がまだ小さかった頃から、家族で出かけるときに、わたしは良くスカートをはいていました。地下鉄などに乗っていると、子ども達はわたしに呼びかけるとき、スカートを引っ張りながら、「パパ」と呼びかけるのです。家族の中では「パパ」でも、あまり問題は無かったのですが、スカートをはいている人が「パパ」ですと、周りの人たちがビックリします。それでも、地下鉄はまだ良いのですが、女性トイレや温泉の女風呂で「パパ」と呼びかけられるときには、冷や汗ものです。そこで、「パパは『パパ』だけど、『パパ』と呼ばれると困ることが多いので、別の呼び方を考えてください。」と子ども達に提案し、家族会議で決まったのが、「父」をカタカナにして、詰まらせた「チッチ」という呼び名なのです。

また、子ども達と昔の写真を見ながら、整理をしていたとき、こんなことがありました。わたしが下の子を抱っこしている写真が出て来ました。下の子はその写真のわたしを指さして「この人誰？」と聞いたのです。下の子の記憶の中では、わたしは昔から女性の姿だったようで、こっちが驚かされた出来事

でした。

上の子が盲腸で入院したときには、わたしは最初に付き添いをしていました。看護師さんは、わたしを「お母さん」と認識していたのですが、途中で付き添いを連れ合いと交替したために、混乱されたようです。後で、「何で、最初に看護師さんにお母さんと呼ばれたときに、違いますって言わなかったの！」と、連れ合いに叱られてしまいました。

病院と言えば、連れ合いが具合が悪くなって病院に連れて行ったときに、一緒に診察室に入ろうとしたわたしは、入り口で「ここで待っていてください」と制止されてしまいました。一通り診察が終わったのでしょうか。廊下のベンチで待っていたわたしは、看護師さんから、「患者さんとはどういうご関係ですか？」と聞かれ、配偶者であることを告げて、始めて診察室に入ることを許されました。

「夫」だと名乗ったわたしを見ながら、「旦那さん！ですか？」と返して下さった、看護師さんの顔が忘れられません。男の姿だったときには、「夫」だと名乗らなくても、一緒に診察室に入れたのですが、今では、夫婦だと名乗っても信じてもらえない、わたしたちです。

家族で外食に出かけても、わたしたちは、一家族とは認識されません。お会計の時には必ず「ご一緒に宜しいですか？」って聞かれています。最初のうちは、「一家族ですから！」なんて、言ってみたこともありましたが、レジの人にはどうでも良いことですからね。最近は、素直に「一緒に良いです。」と答えています。

子ども達の友達が、家に遊びに来るとこんなことが起こります。わたしの連れ合い(妻)に先に出会ったお友達は、連れ合いを母親だと思います。わたしと先に出会ったお友達は、わたしを母親だと思います。そして、別の機会に遊びに来て、先に出会った「お母さん」と違う人に出会った友達は「この人は誰?」という疑問を、子ども達にぶつけます。お母さんに見える2人が、実は「お母さん」と「お父さん」だと知ったときに、小学生ぐらいまでは、何となくそのまま受け止めます。でも、中学生にもなると、子ども達の冗談だと思って「またまた、本当はどうなの?」と返してくるのです。子どもが高校生になって遊びに来た友達が、わたしが父親であることを知ったときに、「うちのお父さんと取り換えて欲しい」と言っているのを聞いたときには、さすがに面食らいましたが、ジェン

ダーバイアスが経験の中で身についてくることを、子ども達の友達の反応が良く示してくれているなど、毎回面白く思っています。

一般的な「家族像」とは、ちょっと違う我が家と出会う人たちは、いろいろとビックリされたり、混乱されたりされるようです。「周りの人に、気を遣わせてなにが面白いの。」と、苦言を呈される方もいらっしゃると思います。でも、わたしたち家族は仲良く、ささやかな幸せを大切にしながら過ごしています。ですから、こんな家族もいるのねと認識してもらえたら嬉しいです。そんな認識を多くの人がしてくださったら、きっと世の中ももっと暮らしやすくなるように思うのですが、如何でしょうね。

余談ですが、配偶者を性別に関係なく呼ぶ、良い呼び方ないでしょうか。連れ合いってちょっと熟れない呼び方なもので...



■ ■ ジェンダープロジェクトより ■ ■

2006年の第1回聖公会女性会議から7年を経る今年、第2回の女性会議を開催することになりました。これは、昨年開かれた「2012日本聖公会宣教協議会」での提言を実現するためのプロセスとして開かれます。会議の目的は「女性の司祭の実現に関するガイドラインについて学ぶ」「意思決定機関への女性の参画を推進するために」「黙想・学びなどによる参加者のエンパワメント」です。今回の会議は様々な事情により、第1回目より規模を縮小して行うため参加者は、各教区派遣の代表者、管区諸委員の代表者、主教会から、と限られた参加者となり自由参加枠が設けられませんでした。会議の詳細はタリタ・クムを通して、また9月に予定されている「聖公会女性フォーラム」の場などをお借りして報告させていただきます。どうかこの「第2回聖公会女性会議」のためにお祈り下さい。